ようであるという。その一因として、過去の語りを「再現」、「再提示」するという（言語内）翻訳の実践において、語りの形式ではなく、意味、特に線的に展開するプロットが規範化され、それが「真っ当な文芸」の標準となったのではないかという可能性が挙げられている[59]。これと関連した別の要因としては、他の先住民社会の多くでも見られるように[60]、今日のルシュツィードの語りは、主にかつてのように大人を聴衆として為されるものではなく、学校という近代西洋的な組織のコンテクストの中で演じられるものとなっており、この種の組織に附与されたメタ語用的編成が、明示性や意味、線的なプロットの重視など、上記のような特徴をもたらすのに貢献しているのではないかと推察される。

以上、見てきたように、翻訳という行為には、単に、明示的な言及指示機能（明示的に言われていること）だけでなく、常に、文化的なメタ語用的フレームが関与している[61]。実際、翻訳の語用的側面、たとえば説得効果や整合性・一貫性などに関して、より重要性を持つのは、言われていることではなく、むしろ、言われていること・為されていること、それらを統制している社会文化的なメタ語用的フレームなのである。その意味で、メタ語用的フレームは、翻訳という行為・語用にとって、その核心に置かれるべきものであるといえよう。加えて、同じくAiu（前掲箇所）によれば、ハワイ人としてのアイデンティティを持つ人たちは、ハワイ語話者ではなくても、上の ʻāina のような語彙のハワイ社会文化的な共示を理解できるという。ここにも、言語（言及指示のコードとしての言語）と文化的なメタ語用的フレームとが異なったレヴェルで機能し、前者とは独立に後者だけでも理解、異言語・異文化間の理解、すなわち翻訳が成就しうるということが示唆されている。

第2節第2項　ことばの巣とハワイ語復興運動

上でも述べたように、同様の特徴は、アメリカ本土の「インディアン英語」においても看取されるが、ここでは、このハワイ語の法廷や公聴会での通訳と、上に挙げたようなそれにまつわるいくつかの論点に関与する社会言語学的・社会文化的なコンテクストについてやや詳細に論述し、上記のような通訳・翻訳などの言語使用が持ちうる社会文化的意味を示唆したい。

以下、主にMcCarty（2002: 297-299）に依拠して、ハワイ語復興運動の歴史を概観しておく。まず、いわゆるハワイアン・ルネサンス運動（松原、2002）は、市民権運動を背景として、大学でのハワイ語の授業、週1回のハワイ語トークショー、ニューズレター、ハワイ語学校や学習会、ハワイ語の道路名称の推進、伝統的とされる地域へのハワイ語のみの旅行などといった活動から始まった。1978年に至るとハワイ語は英語と共に州の公用語に制定され、ハワイ語、ハワイ文化、ハワイ史が公立学校で教えられるよう規定された。しかし、これらではハワイ語使用の衰退を防ぐことは到底できないと考えたウィルソン（William Wilson）とその妻（Kauanoe Kamanā）、そしてその同志たちは、1983年に、小学校就学以前の幼児を対象とした完全なハワイ語イマージョン学校「ことばの巣」（‘Aha Pūnana Leo; ‘Nest of Voices’）を設立する。親たちの支援によりこの学校は成功し、ウイルソンらは州に対してハワイ語を教育媒介言語とした小学校（Kula Kaiapuni Hawai‘i; ハワイ語イマージョン公立校）を作るようにロビー活動を展開、1980年代後半までにはハワイ語による教育は6年次（Grade 6）まで延長された[62]。その後、中等教育まで伸長、1999年の春には、小学校就学以前の幼稚園から高校3年（Grade 12）まで一貫してハワイ語イマージョン教育を受けた生徒が初めて高校を卒業するに至る。この時点で、ハワイ語イマージョン教育をとおしてハワイ語を使えるようになった子どもたちの総数は1,800人に達していたと推計され、現在では、ハワイ語での教育の機会は大学、ひいては大学院教育にまで拡張されている。

言うまでもなく、就学以前のこどもを対象とした「ことばの巣」（language nest）プログラムは、ハワイでハワイ語を対象としたものだけでなく、ニュージーランドでのマオリ語、カナダでのモホーク語を対象としたものなど、他にも広く知られたものが存在する。実際、Hinton（2011: 298）は、ことばの巣運動は、ポリネシアから豪州、欧州、カナダ、アメリカ本土、ラテン・アメリカを含め、世界各地に広がり、たとえば、2008年以降、メキシコ、特にオアハカ州で「ことばの巣」（Nidos de Lengua）が試みられており、2009年後半以降は少なくとも10言語（ミシュテカ、サポテク（サポテカ）、クイカテコ（Cuicatec）などの諸語）での巣が存在し、欧州でも、サーミ語からマンクス語（マン島語）まで、さまざまなことばの巣が設立されていることを報告している。

遡れば、「ことばの巣」の起源は、1982年、マオリ語（マーオリ語（te reo Māori））を就学以前のマオリの子どもたちに4〜5年間、毎日、聞かせ話させることを目的とし、当初は親たちが独自に始めたニュージーランドのイマージョン・プログラム（Te Kōhanga Reo; Ngā Kōhanga Reo）であった。そして、名称ともども、このプログラムがハワイへと、移植=翻訳されたのである。したがって、上記のように、ハワイのことばの巣は歴史的には、小学校就学以前の幼児を対象として始まり、3〜5歳の子どもたちに毎週5日、1日10時間、ハワイ語だけを聞かせ話させるというものであったのだが（Schütz, 1994: 366-367）、その後、ハワイでは15年かけて11の私立のハワイ語学校（ハワイ語を教育媒介言語とする学校）、そして州の教育局の協力の下、16の公立のハワイ語学校へと拡張していった。就学前教育から中等教育まで、ハワイ語を媒介言語とした学校で教育を受けている児童・生徒はハワイ人系のみならず非ハワイ人系も含め、総計約2,000人に上っており、現在、ハワイ州にいるハワイ語を話すか、理解する者1万5,000人ほどの大多数は、ハワイ語を媒介言語とした教育をとおしてこの言語を習得した者であるとされている（Coronel-Molina and McCarty, 2011: 362）。また、非営利団体である上記の ʻAha Pūnana Leo が大学奨学金として数百万ドル、加えて、優れたコンピュータ・ネットワークを提供しており、現在までにハワイ大学ヒロ校にハワイ語のカレッジが設立されるまでに至っている（Thomason, 2001: 244）。

他方、当初より、ハワイ語での教育に対しては、19世紀以来の公立校のみならず私立校でのハワイ語での教育を抑制する法的規制など、数多くの障害があった。親や教育者によるロビー活動の末、この種の障害が克服され、ハワイ語による教育プログラムが増加した後になっても州議会は適切な予算をこれらのプログラムに割り振ることをせず、その結果、年が経つにつれて教育プログラムの数と資金とのミスマッチは増大、個々のプログラムが受ける助成は減少し、運営は困難さを増していくことになった。

また、ハワイ語再生運動内部も一枚岩ではなく、先住民ではないハワイ語教師や学者たちが先住民を代表し後者の「声」（ネイティヴの権利、責任、権威（kuleana））を我有していると非難されている。さらに、コーパス計画に関わる権威についても、ハワイ語の第二言語話者にすぎず「英語の世界観」によって